〈最終講義〉

生老病死を問う

中　村　尚　司

はじめに

やがて死ぬけしきは見えず蝉の声

2006年10月18日に龍谷大学で行われた報恩講の式典に参加し，この芭蕉の句を話題にした法話を聴きました。大谷大学の木村宣彰学長による「空しく過ぎることのない人生」と題する記念講演です。「やがて死ぬ」と分かっているからこそ，力を尽くして精一杯生きましょう。それが法話の主旨です。この法話は，親鸞聖人の和讃「本願力にあひぬれば　むなしくすぐるひとぞなき功徳の宝庫みちみちて　煩悩の濁水へだてなし」を踏まえています。本願力に遇う人とは，信心の定まった人でもあります。あとは仏恩に感謝して，力を尽くして生きるのみでしょう。芭蕉は，滋賀県湖南の幻住庵で秋の坊に示したこの句とは別に，『卯辰集』では，「やがて死ぬけしきも見えず蝉の声」とも詠んでいます。木村学長の主旨に沿う解釈をするならば，こちらの方が適切かもしれません。

松尾芭蕉の場合は，しかしながら，「空しく過ぎることのない人生」という教訓を引き出したかったのではありません。前詞に「無常迅速」とある通り，無常観の表白として，この句を詠みました。ついでながら，元禄期の「無常」という言葉は，現代日本語とはややずれていて，「形あるものは必ず壊れる」という原義にもう少し近い意味を持っていたはずでしょう。芭蕉が観察した蝉は，「空しく過ぎることのない人生」をめざして声を上げていたのではなく「無常迅速」を際立たせる情景の主役でした。芭蕉の眼には，蝉の姿に「無常」がいくぶんか透視できていました。「無常迅速」の対句は，「時不待人」です。時間というものは，「空しく過ぎることのない人生」も，「空しい人生」をも，ともに待ってくれません。思いがけないほど急速に，私たちの暮らしは変化します。

2006年度宗教委員として式典の壇上に着席して，この句の解釈を聴いていた私の感懐は，木村学長の法話とも，詠み手の芭蕉の「無常迅速，時不待人」とも違っていました。むしろ，大声を出している蝉の立場はどうだろうか，と考えていました。いうまでもなく，私が蝉になり代わって感想を記すわけにはまいりません。しかし，「蝉も私も同じ生きもの」という点だけは，共通しています。その限りで類推すれば，当の蝉はいささかも「自分が死ぬ」とは考えていなかったでしょう。私も蝉と同じ生きものとして，「自分の死」を私自身の知覚に取り込むことができません。その点にこだわって，考えを進めてみましょう。

松尾芭蕉と同じ漂泊の俳人である種田山頭火に，自由律で詠ったほぼ同趣の句があります。山口県の小郡に残る山頭火の寓居「其中庵」を訪ね，彼と交友のあった人びとの間に残る話を聞いたことがあります。

空へ若竹のなやみなし

詠われた心象風景は，芭蕉の句と同じです。はじめの3音節「空へ」は，「空へ向く」と言わずに，2音節を省く自由律を駆使した山頭火の自由そのものです。定型に慣れた人の目や耳に，気ままな発語感と同時に2音節分の欠如感を残したあと，日本語韻文の定型に慣れた5音節が2つ続き，描かれた心象が落ち着きます。山頭火ほどの技量を持ってすれば，「空へ向く　若竹の芯　なやみなし」と定型俳句にまとめることに，さほどの工夫も要しなかったでしょう。しかしながら，それでは彼の破格の「なやまない」人生が，月並みの不自由な暮らしに縛られます。

この句では，芭蕉の蟬の代わりに，若竹が主人公です。しかし，芭蕉の句に見られた強い無常観がなく，単純かつ放埒で明快な世界が描かれています。放縦ではあるが，その分だけ世間との折り合いに苦労した山頭火の生涯とも重なります。それは蟬や若竹のように自然に生きて，しかもさみしくない暮らしを求めて歩いた生涯です。たび重なる挫折と失意の果てに，半僧半俗の行乞として，漂泊の旅を続けた山頭火は，1930年10月20日に「歩かない日はさみしい。飲まない日はさみしい。作らない日はさみしい。ひとりでゐることはさみしいけれど，ひとりで飲み，ひとりで作ってゐることはさみしくない」と記しています。歩けば，飲めばそして作句すれば，山頭火にとっては，蟬や若竹のような自然な暮らしが，達成できたのでしょう。

報恩講は，陰暦11月28日に厳修されるべき，浄土真宗の開祖親鸞聖人の命日法要です。東西の両本願寺と異なり，龍谷大学の場合，親鸞の命日にこだわらず10月18日に報恩講を行っています。信心が決定した者の報恩を説いた親鸞は，山頭火と違って飲酒におぼれたりしない強い意志と自制心を持っていました。しかし，山頭火に負けず正直で自然な生き方を求めて歩いた人でもあります。親鸞が，極楽浄土や来世について多くを語らなかったのは，「語れることだけ語る」生き方を堅持したからでしょう。後世の私たちを強く惹きつけるのは，非僧非俗を自称して，在家主義と出家主義の障壁を乗り越えようとした果敢な挑戦の生涯です。私自身は意志も弱く正直ともいえませんが，私なりに「自分に語れないことを語らない」という立場から〈生老病死の問い〉について記してみました。

私が意識的に〈生老病死〉を問うようになったきっかけは，親しくしていた龍谷大学経済学部教授の鶴見良行さんを，12年前（1994年）の12月に失ってからのことです。亡くなったときの良行さんは，現在の私の年齢と同じ68歳でした。直前までふたりで一緒に夜遅くまで，大学院の合同ゼミをしていた仲です。朝早く急死の知らせに駆けつけ，まだ体温のぬくもりが消えない良行さんの遺体に対面したとき，まるで自分の身体の一部がもぎ取られたような思いをしました。

それから12年の歳月が過ぎ，少なくない肉親や知友が死別しました。とりわけ今年（2006年）は，中学時代に最も親しくしていた金子礼三君，次いで良行さんの従姉である鶴見和子さん，東大自主講座の宇井純さんの順でお別れをしました。マイクロ・トライボロジーの研究者である金

子君とは，和歌山大学システム工学部光メカトロニクス学科教授としての付き合いはまったくありませんでした。しかし，若い頃から種田山頭火の放埒な生き方に憧れていた仲間でした。山頭火の漂泊生活を語る金子君の眼は，趣味である航空機の操縦桿を握るときのように輝いていました。

宇井さんからは，明治期の内務省が創った公害概念を，「穢れ」の問題に架橋する示唆を得ました。私は1976年メキシコ市で開催された，最後の「オリエンタリスト会議」に参加しました。植民地時代からの長い伝統を誇るこの国際会議が，反オリエンタリズムの時代の声に抗しきれず，次回から「アジア・北アフリカ人文科学国際会議」と改称すると決めた年でもあります。宇井純さんが16ミリのフィルムを担いで登場し，「公害日本」を英語で “Polluted Japan” として紹介しました。自然な漢字の用語法に従えば，公益が不特定多数に利益を及ぼすのに対して，公害は不特定多数に被害を及ぼす行為です。しかし，日本近代の内務省行政が創出した公害概念は，私企業が私的な利益のために地域住民に害を及ぼすという窮屈なものです。公権力や公企業の加害者性は，問えないものとされていました。これでは環境破壊一般を，公害問題として扱うことができません。

宇井さんの “Polluted Japan” によって「公害」は，世界語の Pollution に繋がりました。そのころから，Environmental Pollution という名称を掲げた国際会議や国際機関が族生したことはよく知られています。インド英語では，Pollution と言えばなによりもまず「穢れ」を意味していました。日本人の聴衆が，日本から来た講演者に下手な英語で質問することの気恥ずかしさに耐えながら，宇井さんに対して，公害—汚染—穢れの関連性について質問したことを思い出します。公害という旧内務省行政の概念が，実は穢れと言う社会関係のあり方に通底していることを教えられました。公害概念は，私企業が利潤追求を優先して地域住民に害を及ぼす行為に限定して，公権力を免責した歴史を引きずっています。日本的な狭い役人用語を “Polluted Japan” として解き放ち，旧内務省衛生局を継承した厚生官僚を免責しなかったのは，宇井さんの貢献です。

この会議を終えて日本に帰ると，私の職場に玉野井芳郎さんがみえました。カール・ポランニーの議論を手がかりにして，「広義の経済学」に挑戦しましょうというお誘いでした。当時，ポランニーの主著，“Great Transformation” は都内の公共図書館に所蔵されていませんでした。東京大学教養学部人類学教室で借りて読み，新評論から刊行したばかりの拙著『共同体の経済構造』に援用したのを奇貨にして，声をかけてくださったそうです。

玉野井さんは，労働組合運動などの経験がないのに，オルグの上手な方でした。一橋大学の増田四郎学長，東京大学農業経済学の古島敏雄教授，京都大学人文科学研究所の河野健二教授，法政大学経営学部の清成忠男教授とともに，「地域主義研究集談会」なるものを組織されていました。その５名の中に，上智大学国際関係研究所の鶴見和子教授が加わっていました。事務局はビザンチン史の樺山紘一東大教授，計量経済学に詳しく一橋大学教授と東大教授を兼任した中兼和津次さんに加えて私が入りました。

このとき鶴見和子さんから，西欧諸語に存在しない内発的発展のような概念について，日本語

を使わない人びとに語る工夫を教えてもらいました。Endogenous Development という新造語を駆使して，プリンストン大学に博士論文を提出した和子さんも，宇井さん以上に，内務省行政の伝統に異議申し立てをしていました。私たちは日本の各地を遊行し，地方都市で集談会を開きました。そのような機会を利用して和子さんと青森県の竜飛崎を旅し，当時工事中だった北海道への海底トンネルの掘削現場を見に行ったことがあります。女性が地下のトンネルに入ると事故が発生する，という迷信のため和子さんだけが入り口で待たされました。「鉄道建設公団に抗議しましょうか」と聞くと，「皆さんのお話を聴いたり，写真を見せていただければ十分です」という返事でした。不当に扱われた水俣病患者のためには，熱意を込めて取り組んだ和子さんだが，ご自身の便宜についてはたいへん謙虚な方でした。

松本市における研究集談会に参加し，食事のあとコーヒーを飲んでいたときのことです。いずまいを正された和子さんが「中村さん，私は弟の俊輔を尊敬しています。たいへん頭の良い人で，いつも適切な判断をしてくれます。困ったときには，俊輔の意見を聴き，それに従います」と話されました。なぜ20歳も年下の私にそんなことを話されるのか，と奇異に感じたものです。京都育ちの私が，俊輔さんに共鳴していると思われたのかもしれません。正直なところ，良行さんとは親しくしていましたが，俊輔さんとはほとんど接点がありませんでした。その場を繕うために，「庶民派知識人の代表選手である吉本隆明は，俊輔さんのような飛び切り高級な知識人には近寄らない方が良いと言っていますよ」と答えにもならない答えをしたものです。

戊辰戦争の賊臣だった後藤新平（1892年に内務省衛生局長）を祖父に，高級官僚であると同時に流行作家だった鶴見祐輔（1955年に鳩山内閣の厚生相）を父に持つ優等生の和子さんは，劣等生とみなされた弟の俊輔さんに代わって，親の世話に生涯の最も貴重な時期を過ごしました。日本近代のエリートとして時代の波頭を乗り切ったかに見える鶴見家は，エリートであるがゆえに，刻苦勉励して西欧近代に追いつかなければならないという脅迫観念も抱えていたようです。

祐輔の弟の憲は東北大学で学ぶつもりで仙台に行くが，東京に呼び戻され東大法学部に転進し，外交官として，日本軍占領直前の時期にシンガポール総領事となります。その長男の良行さんも東京外国語大学に進学するものの，母親に東京大学法学部を再受験するよう強要されます。良行さんはこのような鶴見家の鬱屈や葛藤を，劣等生の俊輔さんと共有していました。優等生の和子さんも，お家大事と考えて生きただけの人ではありません。劣等生の俊輔さんや良行さんの依頼で練馬の住まいにベトナムの戦地に行くことを拒否した黒人脱走兵を匿ったり，祖父や父親の内務・厚生行政が遠因とも言える公害の地水俣市に赴き，宇井さんの仕事を支えたりします。

数年前，京都の東大路をバイクで走っていたところ，俊輔さんの長男である太郎さんに車椅子を押してもらっていた和子さんに出会いました。父親と同じ脳卒中で倒れたはずの和子さんから「中村さん，私もう死んじゃったのよ」と元気な声が飛んできました。すかさず「死んだ人は黙っていてください」と答えると，「死人に口ありよ」と返ってきました。車椅子の和子さんがいたのは，反対車線の歩道でした。バイクで逆走して，警官に罰金を取られると困ると思い，その場を離れました。それが死んだはずの和子さんと口をきいた最後でした。もう語ることのでき

なくなった良行さん，金子さん，和子さん，宇井さんたちの仕事を偲び，私なりに生老病死を問いたいと思います。

1. 生まれる

地球上に存在する生物界の一員としてのヒトは，社会関係の総体としての人間と同じと言えば同じです。しかし，まったく違うと言えば，それも正しいでしょう。象ほど大きくはないが，猫ほど小さくもない中型哺乳動物である身体組織に関する限り，ヒトと人間とは疑問の余地なく重なっています。けれども，同じ身体を持つとはいえ，両者の間には無限の距離が横たわっています。ヒトは生物そのものですが，人間は長い年月をかけて徐々に生物離れし，他の生物の生き方に比べると，遥か遠くまで来てしまったからです。この距離が私たちを苦しめ，悲しませると同時に，限りない生の喜びも与えてくれます。

ヒトはだれでも，当人以外の他者の眼には，哺乳動物としての身体を備えて誕生します。この世の中に生まれ，人びとの間で育ち暮らしはじめたことは，誰の目にも疑いようがない真実のように思われます。しかし，当の生まれてきた乳児にはその自覚がありません。人生の端緒を振り返ってみれば，人間である私が本当に，この世に生まれてきたのでしょうか。自分がヒトとして誕生した日のことを覚えている人間は，どこにもいないはずです。この世に存在していること自体は間違いないとしても，そう気付いたときにはすでに人間として成長し，家族や社会の一員として活動しています。私個人の生活史を振り返る限りでは，もともと無限の昔からこの世間に存在し続けていた，と言い張ってもあながち見当違いではありません。いうまでもなく，誰にも父や母がいたことは否定できません。生物である以上，自分自身の存在が一組の男女の関係史の産物である，と考えるのはごく当然です。

多くの人が「個人の生命や心はいったい，いつから始まるのだろうか」と問いかけます。常識的には，両親の生殖細胞が減数分裂し，特定の卵子が特定の精子を受精したときに始まるといえます。しかし，受胎したのちに何かの事情で，卵細胞の増殖過程に支障があって，途中で胎児としての成長が止まるかも知れません。それは生れる前のことです。胎児自身が気付くことはありません。助産師などの第三者からも，生命の終わりとは扱われません。それは産婦人科の医師による人工妊娠中絶が，殺人罪を構成しないのとまったく同様です。このような流産，死産，中絶などにより，出生以前に生命活動が終わった場合，日本社会では死亡率や平均寿命の計算の対象になりません。まだ「いのち」が始まっていない，とみなされます。

たいていの人は，母親の体外に出る瞬間が「いのち」の始まりだと考えます。他人である第三者の眼には，そのように見えます。もっとも，出産する母親の側から見れば，10箇月近く胎内に育んできたので，出産時が「いのち」の始まりというより，１歳児の始まりと感じられるかもしれません。しかし，生まれたはずの当人は０歳児としての自覚どころか，まったく何も気付きません。母親の子宮の中がいかに居心地が良かったか，知っている人は誰もいません。狭くて暗い産道から，広くて明るい外界に出たときの感激を語れる人はいません。そのあと，どのようにし

て母親の乳房を見つけ，口に含むようになったか，覚えている人もいません。眼が開き水晶体を通して網膜に像を結ぶようになっても，大脳皮質の神経細胞で処理して，意味のある知覚像を描けるようになるには，まだかなりの時間がかかります。

まして母親と父親との区別ができるようになるのは，もっともっと先のことです。母や父という観念の形成と，言語の習得とは不可分です。生後何年何ヶ月から，母と父とが区別できるようになったか，はっきりと語れる人に出会うことはないでしょう。そればかりか，誰もが何度も何度も失敗を繰り返しながら，ようやく２本足で立ち，歩けるようになったはずなのに，その苦労を自分の子や孫にさえ伝えることさえできません。他人の目には，愛くるしい赤ちゃんであっても，当人はまだ生れていないのと同じです。自分が自分であることを知らないうちに，這い這いしたり，つたい歩きしはじめます。いつのまにか，特定の母語を身につけます。

だから正直に言えば，私たちは生れることなしに，そもそもからこの地上に存在している，というよりほかないのです。私が知っているのは，私以外の他人の誕生だけであって，決して私自身の誕生ではありません。私が自己の存在に気がついた時には，「すでにはるか以前から，この世に生きている」というよりほかありません。一人称で語ろうとすると私の誕生は，周りの世界の成立と同じくらい古く感じられるものです。生誕の記憶の古さだけをとりあげると，20歳の青年も80歳の老人も，そんなに大きな違いはありません。

まぎれもなく大型の哺乳動物でありながら，その身体組織は同類の仲間とはずいぶん違っています。DNA のゲノム構成において，一番近いはずのチンパンジーやオランウータンとでも大きく違います。もともと霊長類のヒトは，他の哺乳動物のように厚い乾いた皮膚や毛皮で身体組織を保護すると同時に，身体内と身体外を明瞭に区分できていたはずです。シャワーを浴びるときに，自分の身体に注目してみましょう。他の哺乳動物と異なり，人類の身体は剛毛を失い，弱い湿った傷つきやすい皮膚で覆われているだけです。

いつのころからか，人類だけが皮膚の外側と皮膚の内側との境界を，次第に希薄にして来ました。身体組織の境界があいまいになるにつれて，見ず知らずの他者に傷つきやすい身体をさらすわけにはゆきません。思えば手間のかかる営みですが，毛皮を捨てた分だけ，動植物を原料にした衣服で保護するようになります。ヒトから人間への変化は，身体組織の表面だけに留まりません。声帯のまわりの筋肉や三半規管や蝸牛殻などの内部器官も，大きな変化を遂げます。

人は単に生物として自存することができず，人間として「人と人の間」に生きなければならないからです。別言すれば，ヒトは人間によって，はじめて人間になります。人間になると，自分の顔を認知できなくても支障なく生きられますが，仲間の顔を識別できなければ生きてゆけません。鏡や写真機が普及するまで，多くの人は自分の顔を知らないけれど，親子，兄弟，恋人，隣人，友人などの顔を見誤ることはありません。誰にとっても，自分の顔よりも自分以外の人の顔の方が大切です。周囲にいる人びとの社会的な役割は，顔以上にもっと大切です。自分が生まれたことは分からなくても，自分の周りの人びととの距離のとり方は，誰にとっても死活問題となります。

2. 老 い る

生まれることもなく存在している一人称の私が，みずから老化することは決してありません。長幼という意味での自分の位置を知るには，同じ身体組織を持つ仲間が必要です。私にとって最初の同類の仲間は，たいていの場合，20歳か30歳ほど年長の母や父です。母や父という言葉を知らないときから，最も年長で食事や排泄の世話をしてくれる仲間を，長時間かけて自分の親だと観念します。知り合いの住職が経営する孤児院では，幼児が男性僧侶のことを「母さん」と呼んでいます。

やがて親ほど年齢は離れていなくても，四六時中一緒に暮らす親密な仲間がいることに気付きます。兄弟姉妹であったり，従兄弟や従姉妹です。時には，孤児院の仲間であったりします。親は自分を保護し，食べ物を一方的に供給してくれます。最初の贈与関係です。贈与者と受贈者とは，上下の関係にあり，支配従属関係の出発点です。ところが，兄弟姉妹との関係はほぼ対等で，相互の借り貸しが基本です。むつかしい言葉を使えば，最初の消費貸借関係です。しかし，借りを返しても完全に自由にはなれません。生物的な繋がりが付きまといます。自分の意思で兄弟姉妹を選ぶことも，変更することもできません。

このような原初的な贈与や貸借の関係を通じて，家族に準じた結合が半ば人為的に形成されます。しかし，これだけでは不十分です。子供が大人になる期間が長いため，持続性が顕著であるという点を除けば，人間以外の動物でも多かれ少なかれ，短期的な贈与や貸借の関係を持ちます。この限りでは，家族と呼ぶのもはばかれるほどの結合でしょう。

人間が永続的な家族形態を獲得するには，配偶者を固定する仕組みが必要不可欠です。動物の生殖の必要から見ると，特定の配偶者関係が長期に固定されることは，きわめて不自然であり，次世代の再生産に不利に作用します。にもかかわらず，人間だけが不自然を承知の上で，贈与と貸借のすべてを動員して配偶者関係を固定しようとします。このような家族形態の成立の背景には，火の使用が横たわっています。火の使用を通じて，贈与と貸借の関係を飛躍的に拡大できるからです。

生物学的な関係を基礎に持つ親子や兄弟姉妹に比べて，配偶者の選択はほぼ人間的な意志に基づきます。交叉従兄弟婚のように，生物学的な根拠を重視する事例も少なくありません。その場合でさえ，家族形態の永続性に配慮したインセスト制約の方が重要でしょう。人間の意志によって配偶者の選択を行うことができるようになって，初めて家族らしい家族が形成されます。親子，兄弟姉妹だけでなく，配偶者関係が加わることによって，家族が人間の暮らし方を決定づけるようになります。

人は家族の中で誕生し，家族の中で老い，家族の中で病み，家族の中で死ぬようになります。このことの無理が親子喧嘩，兄弟喧嘩，夫婦喧嘩を招き寄せますが，さしあたり家族の中でヒトは人間になります。家族は常に解体の危機をはらんでいますが，国家やその他のいかなる集団組織よりも人類史に長く命脈を維持してきました。生物学的な関係を基礎にしたヒトの暮らしから，自己の意思と選択で道を拓く人間へ変貌を遂げます。

加齢による老化そのものは，生物としての自然の過程であるとはいえ，私は決して一人では老いません。老いているかどうかは，私以外の誰かが決めることです。私の周りの人たちが私よりも若ければ，私はもはや老人です。小学校一年生のクラスを担任する教員は，たとえ25歳でも子供たちの眼から見れば確かに老人です。しかし，平均年齢が85歳の老人ホームで暮らす人は，75歳でもまだ老人とは言えません。もちろん動作は緩慢になり，知覚は鈍くなりますが，水泳や自転車を習い始めたばかりの不自由さに比べれば，それほど大変でもありません。

認知症老人の介護がはらむ最大の困難は，介護者側の問題です。両親や配偶者のような近親者の介護であれば，その困難はいっそう深刻です。たいていの場合，介護者はボケていません。しかし，あと数年後にあるいは数十年後に，自分自身もこのような被介護者の痴呆老人になるのではないか，という不安を抱えています。自分が痴呆老人になったとき，このような扱い方をして欲しくないと思うことが少なくありません。当たり前ですが，痴呆老人ではない人が，痴呆老人の困難を体験することはできません。眼前の老人の姿から，将来の自己を想像するよりほかありません。

10歳の子供が，お母さんの胎内にいたときの苦労を想像するようなものです。しかし，成長した子供が胎内の苦労を想像するのと，壮年期の介護者が老人ホームの苦労を想像するのとでは，決定的な違いがあります。10歳の子供が胎児に戻る可能性がまったくないのに対して，介護者が自ら痴呆老人になる可能性は，決して少なくない確率で想定することができます。ここに悲劇の根拠があります。自ら寝返りひとつ打てず，自己表現の手段を持たない乳児の暮らしがどんなに苦渋に満ちていると見えても，自己表現の手段を持たない痴呆老人の苦労とは違います。眼前の痴呆老人は明日の自分かもしれない，と想像するからです。現存する多くの老人介護施設は収容された認知症患者とともに，ボランティアであったり，近親者であったりする非痴呆老人の想像力と闘わなければならない，という宿命を持っています。

3. 病　　む

当然ながら長い人生には，気分がすぐれなかったり，思うように身体が動かなかったり，咳をしたり，発熱したり，発疹が出来たり，出血したりして，不自由なことがらをたくさん経験します。しかし，それが老化なのか病気なのかが，私にはわかりません。哺乳動物の一員として，生活のリズムの中で疲れたり，眠くなったりするのは，健康な証拠だという人もいます。いずれにせよ，病気を診断するのは，常に私以外の誰かです。老化は生物としての自然ですが，病気は社会が押し付けるものです。

障害者も同様です。視覚や聴覚が不十分だとしても，当人にとっては障害ではありません。喉頭がんの手術のために声帯を失った私の場合，私の発語を意味のある音声として弁別できるかどうかは，聞き手の困難であって話している私の困難ではありません。可視光線の外の赤外線カメラや，特殊な望遠鏡を使わないと数億光年離れた天体が観測できなくても，誰も自分が視覚障害者であるとは考えないでしょう。特定の障害を認定し，障害者手帳を交付し，障害者として扱う

のは社会の側であって，私自身ではありません。病気か健康かという区分と似ていますが，障害の有無は当の私以外の人が決めることです。

私の飼い犬「ゴン」は，生後17年目に長寿犬として認定され，京都市長から表彰を受けました。しかし，表彰を受けたはずの「ゴン」は，かくべつ喜んでいる気配もありません。飼い主の目から見ると，「ゴン」の老化も病状も顕著です。寝そべっている状態から立ち上がるのに，時間がかかり失敗もします。季節の変化に対応した体毛も十分に生えてきません。

かつて規則的だった排尿排便も，発病とともに失敗ばかりです。これまでは犬のような四足歩行をする哺乳動物の安定感を見るたびに，２足歩行の人類が犯した過ちを思い知らせてくれました。その四足歩行の哺乳動物でさえ，加齢とともに足から衰え，爪がはがれたり脱臼したりすることがわかります。とはいえ老犬にとっても老人にとっても，老化も発病も長い生活経験のひとつのプロセスに過ぎません。嵐のような苦悩に満ちていた青春の日々に比べれば，歳にふさわしい穏やかでさわやかな生活を送ることもできます。

私たちが病気に気付くのは，たいていの場合，身体器官の部分的な機能不全という自覚症状に始まります。前日までと違って，思うように手足を動かせません。スムーズに呼吸ができず，息苦しくなります。食べたものが消化できなかったり，下痢や便秘のように排泄に異常が生じます。時には，発熱や頭痛で気付きます。これらの症状は，私の身体に外部から加えられた危害への反応です。マラリヤ蚊やスギ花粉のように，他の動植物が媒介することもあります。だから，一見して病気は個人の受苦であるかに見えます。

象やサルが皮膚病になれば不自由を感じるように，人間もまた病状に応じて不自由が進行したり改善したりします。しかし，象の病気やサルの病気と異なり，人間の私が病む苦労の多くは，社会の側から派生します。自分以外の人間集団が，私を病気にしたり，傷害を加えたりします。往時の結核や近年の HIV のような感染症に恐れおののくのは，当の患者よりも感染していないはずの社会の側です。病気は個人の敵である以上に，社会の敵です。

どのような健康保険制度に加入するか，どの病院へ行くか，医師や看護師とどのように付き合うか，病気の告知方法や治療方針に異議申し立てができるか，見舞い客にどこまで真実を語るか，療養が長期化し医療費を負担できなくなればどうするか，次から次へと病人の悩みは尽きません。このような悩みが，病状をさらに悪化させることも少なくありません。

牛や馬は誕生するとすぐに歩き始めるのに，ヒトの赤ちゃんは異常に長く社会の保護を必要とします。誕生してから10年以上過ぎても，まだ人並みに生きられない場合が少なくありません。乳幼児が成人するまでの期間を長びかせる制度は，社会が病人をつくる仕組みと同じです。それればかりではありません。個体としての身体組織が，外的世界との接触により傷つきやすくなると，病気以上に傷害から身を守る必要も高まります。鎧，兜，盾などの防具も核シェルターに至るまで高度に発達しますが，これで安全ということはありません。

人間ほど仲間殺しに熱心な哺乳動物は，ほかに例がありません。象を殺す象や，サルを殺すサルと比べてください。いつの時代も防具の発達は，武器の発達に追いつけません。人間を病ませ

たり，傷つかせたりするのは，なによりも社会関係の力です。他方，皮膚の境界を越えて相互に助け合うのも，人間の特徴です。この協力関係が進展すると，時にはどこまでが自己で，どこからが他者か区分できなくなるほどです。皮膚の内側の生命活動よりも，外側の生命活動のほうを重視する傾向も生まれます。

いいかえると，ヒトは生老病の過程を通じて，自己の内と外との区分が消滅して人間化します。逆に，次のように言うこともできるでしょう。もともと関係行為のみが人間をつくるのであって，個人としての存在は関係行為の産物に過ぎません。内側と外側の区別のないのが，人間本来の自然なあり方です。その意味で，ヒトの自然なあり方と人間の自然なあり方は，正反対の極地に位置します。

4. 死　ぬ

どんなに年をとっても，一人称の「ゴン」も飼い主の私も死にません。一人称の「ゴン」は，人間でないがゆえに何も語りませんが，人間である私は死にたくても死ぬことができない存在です。もちろん，私は人生のさまざまな場面で，怪我をしたり，手足を失ったり，痴呆になったりします。場合によっては，自殺を試みることもあります。しかし，私はなぜか死ねません。どのような後遺症を残そうとも，私は常に回復します。不思議といえば不思議ですが，私が試みた自殺は必ず失敗します。自殺をした人の成功談を，語ることも聴くこともできません。私たちに聴くことができるのは，失敗談だけです。

安楽死は，近年オランダで社会的に認められるようになりました。その制度に従って，専門医の介助で間違いなく安楽死できる措置を取ってもらっても，それでも私は死ぬことができません。安楽死の当事者としては，必ずや来るはずの死を，夢見ているにすぎないのです。自分がすでに死んだことを知る方法もなければ，親しい人に伝える方法もありません。私にとっては，死はどのような場合も生の一部であり，死を生き抜くよりほかないのです。直接的な死の経験は仮にできたとしても，たかだか臨死体験や全身麻酔の手術程度のものでしょう。

いうまでもなく，生物としての人は誰でも例外なく死にます。25歳まで生きる犬がいないのと同じように，200歳まで生きた人は，何処にもいません。私以外の人は生まれ，やがて老い，病気になっていつの日にか必ず死にます。けれども，私は死ねません。私が見るのは，私以外の他者の誕生，および死去です。

年を取れば取るほど，私の生涯は，親しい人に先立たれた悲しみに満ち満ちています。私は生きているのに，なぜ我が子が死ぬのか。寿命の限られた生き物の一員として見れば，これでは順序が逆だと嘆く人は尽きないでしょう。しかし，幸運にも我が子よりも先に死ねて，長幼の序が定まった，と言明する人は何処にもいません。ひとりの人間として生きる限り，私は自分の誕生についても死去についても語ることができないばかりか，いつまでも終わらない無限定の生涯を生きるよりほかないのです。

このように，自己の誕生と自己の死去は，ともに対象が存在しない知覚です。それゆえ，共に

幻覚もしくは幻影に過ぎません。残酷な話ですが，身のまわりの他者は死すべき存在である一方，自己は不可死で不滅だという薄情な現実に反論の余地はありません。反論の余地がないとはいえ，両者の間には納得しがたいほど大きな障壁があります。私の生死と他者の生死との間には，越え難い高い壁がそびえています。私は生れも死にもしないのに，周りの人はすべて生まれ，かならず死にます。例外のないきびしい現実です。このような越え難い高い壁ができるのはどうしてでしょうか。ものごとを自己の属するシステムの中から見るか，それとも当のシステムの外から見るかの違いです。

天文学者が宇宙空間の内部からのみ見ている限り，宇宙の生誕も終焉も指摘することはできません。内部から見る宇宙では，何処まで進んでもその果てに辿り着くことがありません。仮に果てがあるとすれば，その果ての向こう側の宇宙を想定せざるをえないからです。銀河系，太陽系，地球の大気圏というように，狭く限定しても同じでしょう。宇宙の端緒や終焉を論じるためには，実験不可能な理論的仮説に過ぎないとはいえ，ひとまず宇宙の外部に視点を持たなければなりません。

生物種の個体として存在する私とて同じことで，自己の外に出なければ，その世界には生誕も終焉もないのです。かろうじて知ることのできるのは，自己の外の世界の生誕と終焉だけです。言うまでもなく，宇宙の外へ出ることや，生物としての私が自己の外へ出ることは，古代人ならずとも至難のわざです。とはいえ，人間だけが自他の壁を乗り越えようとする動物です。皮膚で囲まれた身体の活動に満足できず，個体の外へ出ようとする。身体組織の外へ出て，他者の眼を獲得しようとします。

いつの時代でも他人の死体が放置してあると，当然ながら時間とともに蛆虫がわき，腐敗します。人類史上，人びとはこのように腐乱する多くの屍体を目撃して来たに違いありません。目撃する人にとっても，無縁な他人事とは思えません。いずれは自分の肉体もこのように滅びるであろう，と想像するのは決して不自然ではないでしょう。ありもしないから体験することもできないにもかかわらず，生まれる前の世界や死後の世界を，誰もが他者の誕生や死去から想像しようとします。一人称で語ろうとすれば，輪廻や転生はまったく不可能です。しかし，近親者の誕生や逝去に会うたびに，自己の前世や後生を想い描きたくなります。

この越え難い壁を越える方法こそ，名称はさまざまに分れるが，人類の原初的な信仰の営みです。実在しない他者の眼を獲得する努力は，一人称からの超越を必要とします。内部から見れば生れなかったはずの私が，外界にいる者の生誕を説明しなければなりません。死ねない私が，私以外の者の死去を説明しようとするからです。だから，人知を超える何者かが必要になります。この世の外に，エホバやアッラーのような唯一の超越者を想定すれば，宇宙の創造や破壊も可能になります。内的世界と外的世界の厚い壁は解消します。一人称の私も，三人称の他者も，人知を超えた創造主によって統合されます。唯一の超越者を想定しなかったインドや中国のアジア大陸，東南アジアや太平洋の島々でも，自他を繋ぐものとしての信仰は不可欠です。近親者は死ぬのに，自分は死なない現実を説明する方法が他にないからです。

このようにして登場する信仰が，個人の救済を目指すだけであれば，目的の達成はそれほど難しくありません。上に述べたように私は，すでに不滅の生命を持っています。そのことに気付きさえすれば，永遠の信仰心が決まります。信心さえ確定すれば，当人の解脱は容易です。苦痛を覚悟の修行や難行苦行をするに及びません。死なない私はすでに涅槃のもとにあり，成仏しているといってもよいからです。特定の宗教団体を組織し，共同の信仰の「かたち」を作り出す必要もありません。

自他の違いを乗り越えようとする人間の場合，自己の救済のみならず，他者の死に関する合理的な説明が求められます。個人の救済だけにとどまるわけにゆきません。かならず人と人との社会的な関係に働きかけようとします。その地点から，あらゆる信仰は避けようのない矛盾と限界を抱えてしまいます。自分のセクトの内側と外側とに新しい障壁を作ることになります。ほとんどすべての宗教は，生老病死にまつわる苦しみからの解放をめざしているので当然ですが，他者に対する暴力を戒めます。けっして人を殺してはいけません，傷つけてもいけません，とあらゆる種類の暴力を否定します。

しかしながら，どの宗教もセクトの外へ向かう暴力を止めることはできません。時としては積極的に，聖戦の名のもとに大量殺人を教唆します。多くの宗教は内側で「殺すなかれ」と説く一方，外へ向かっては必要ならば宗教戦争や大量殺人を正当化します。他者に説く「殺すなかれ」は，自己の行為の判断基準とならないからです。

自他の高い壁を乗り越えようとする宗教なしには生きられないとはいえ，宗教もまた人間の営みです。既存の壁を越えたつもりになっても，新しい壁を建てがちです。しかも，その伽藍の内部だけで安住することができない。とはいえ，ここで宗教運動の限界について深入りするつもりはありません。教団や結社に組織された宗教が，社会関係の創造者になるとともに，その破壊者になるのは，ここで論じる課題よりも後の大問題です。その大問題に踏みこむ前に，私たちの信仰生活が必要となる根拠として，生老病死を問い続けましょう。

5. 定住と漂泊

およそ2500年前，ガンジス川の中流域では信仰の根拠を家族の内側に求めるか，それとも家族形態を越えた外側に求めるか，激しい論争が闘わされました。リグ・ヴェーダ以来，家族生活に信仰の根拠地を置くブラフマニズムが，ガンジス川の上流から東へ向かう勢力でした。仏教，ジャイナ教，アージヴィカ教など下流から西へ向かう勢力は，既成のブラフマニズムに出家主義で挑戦します。まったく同じ論争とはいえず，社会経済的な背景も異なりますが，西ヨーロッパでも出家主義を採用するルネッサンス以降のカトリック教団に対抗して，プロテスタントの諸教団は在家主義で挑戦します。

西暦14世紀にインド大陸から消滅したアージヴィカ教団に固有の経典は散逸してしまい，仏典やジャイナ教典においてその教義が外道として否定的に紹介されています。「六師外道」の一人であるマッカリ・ゴーサーラは，ゴータマ・シッダルタが悟りを得たのち，最初に出会った思想

家であると伝えられています。どのような教団や宗派も，競争相手の指導者を賞賛するわけにはまいりません。セクトを形成する営みとは，他のセクトを貶める作業に他なりません。しかし，如何に悪しざまに描かれようと，2000年もの長い間，インドやスリランカで多くの民衆を惹きつけて来た理念には，なにほどか現代人にも訴えるものがあるに違いないでしょう。

彼は私たちの生き方が，人為を越えた摂理の下にあるとみなし，ガンジス水系の中流域で拡大しつつあった農耕による定住生活より，他の生物と同じように漂泊することが自然な暮らしだとみなし，村から村へ旅を続けます。解脱を求める難行苦行ではなく，漂泊の生き方そのものを肯定するため，他の教団から揶揄的にアージヴィカ派と名づけられました。現代日本語では，「いきざま派」とでも訳すべきでしょうか。アショーカ王の刻文に記されているように，当の教団の側も名辞にこだわらずその呼び名を受け入れたようです。

外道としてのアージヴィカ教は，社会を変える努力を否定し，もっぱら運命を受け入れるだけの決定論，宿命論を教義とするかのように，他教団から非難されています。しかし，マッカリ・ゴーサーラが説き，多くの信徒を惹きつけたのは受動的な運命論ではなく，きわめて積極的な禁欲の旅です。インドや中国の教典に伝えられる極端にまで誇張した表現を，実生活の経験水準まで割引して読めば，身体を鍛錬し漂泊の旅に生きる人びとの集団でしょう。日本の経験に即していえば，密教の周辺に位置する修験道のような教義だったように思われます。元来浄土教は難行苦行に最も距離を置く信仰の形ですが，漂泊の契機を抱えています。浄土真宗の親戚筋に当たる時宗が，遊行宗と呼ばれて多くの民衆をひきつけてきたのも，偶然とはいえません。積極的な禁欲の旅は時空を超えて，デカルトやニュートン以来の近代科学主義への反省から生まれ，現代ヨーロッパ各地に台頭しつつある「ディープ・エコロジー」に通底する教義だ，と解釈することも可能でしょう。

私見では，在家と出家の壁を取り払い，質素で禁欲的な生き方を最も徹底したのがこの教団の信仰だったように思われます。大地，水分，火焔，大気，歓喜，悲惨および生命が普遍的な世界で，家族形態や身を守る衣類を捨てなければ，人間の自然に至れないという主張だったと思われます。マッカリ・ゴーサーラの思想と直接的な接点はなくとも，役行者，西行法師，松尾芭蕉，種田山頭火など，日本社会にも漂泊の道を選ぶ人びとの流れは脈々と続いています。鎖国の時代にあっても渡世人を自認する，山伏，遊行者，巡礼，旅芸人，木地師，サンカ，簸女（ごぜ），角兵衛獅子などの漂泊の民が絶えることはありませんでした。東南アジアには，生涯を海上で暮らすバジャウ民族のような漂泊の民もいます。人間にふさわしい自然な生き方をめぐる，定住か漂泊かという問いは，2500年後の現代も，なお問い継がれなければならないでしょう。

お　わ　り　に

思えば人間の生き方にとって，生老病死は苦しみや煩悩の源です。なぜこのような父母の子として生まれたのか，なぜ老いて認知症になるのか，なぜ病の床に臥さなければならないのか，な

ぜ志なかばで生涯を終えなければならないのか，問い始めれば尽きることがありません。しかしまた思い直せば，私にとって「生」は，〈いま・ここ〉の暮らしを越えるものではありません。「老」は，周囲の人びととの相対的な位置の取り方に過ぎません。「病」は生きていることの証であり，この世に遍在しています。「死」は，生きている私のはからいを越えています。このような形で思考をめぐらせば，生老病死とは苦痛や悩みではなく，私の生命活動を映す鏡ほどの意味しか持たないでしょう。

アージヴィカ教の行者も遍路の山頭火も，そのような自然で正直な暮らしを生きようとしたに違いありません。しかし他の生物と異なり，「正直に生きたい」という願いと，「正直に生きる」という現実との大きな懸崖に立ちすくみがちです。漂泊の生で完結する人間以外の生物と，生きているうちから墓の心配をする定住者の距離の大きさでしょう。生物界の一員として漂泊を求め，人間社会の一員として定住を確実にする営みは，矛盾に満ちています。人は誰しも，漂泊ではなく，定住でもない矛盾を生きるよりほかないのかも知れません。

※本稿は，2006年12月22日筆者の龍谷大学における最終講義時に配布したものである。

（受付　2006年12月22日）